


医療現場の現実 No.2

SPIKES —— 悪い知らせの伝え方を
"プロトコル"として学ぶ

 **今日のゴール**：「がんです」「余命3ヶ月です」という悪い知らせを、感情任せでも冷酷でもなく、**SPIKES** プロトコルの6ステップに沿って構造的に伝えるスキルを理解する。医学部面接・小論文で「悪い知らせの伝え方」について論じられる力を身につける。

 この授業の問い

1. 「悪い知らせ」を伝えることは、なぜ医師にとって最も難しいコミュニケーション技術のひとつか？
2. **SPIKES** の6ステップを順番通りに行う理由は何か？どのステップを飛ばすと何が起きるか？
3. 患者が「もう聞きたくない」と言ったとき、医師はどう対応すべきか？

💡 SPIKES プロトコルとは

🔑 **SPIKES とは** SPIKES は、1990年代にMD Andersonがんセンターの Robert Buckman らが開発した、**悪い知らせ (Bad News) を伝えるための6ステップのコミュニケーションプロトコル**。世界中の医学部・レジデント研修で標準的に教えられている。「悪い知らせ」= 患者の将来に対する見通しを根本的に・否定的に変える情報（がん診断・余命・治療効果なしの告知など）。

| 文字 | 英語名 | 日本語 | 内容・ポイント |
|----------|---------------------------|-----------|------------------------------------------------------|
| S | Setting up | 場の設定 | プライベートな部屋・座って話す・家族の同席を確認・時間的余裕・携帯オフ |
| P | Perception | 患者の認識確認 | 「今の状態についてどのようにお考えですか？」 患者がどこまで知っているかを先に確認する |
| I | Invitation | 情報の招待 | 「どのくらい詳しく知りたいですか？」患者の情報ニーズを確認してから話す |
| K | Knowledge | 知識・情報の提供 | 平易な言葉で・一度に多くを言わない・"Warning Shot"を使う（「少し難しい結果が出ています」） |
| E | Emotions / Empathy | 感情への対応・共感 | 患者の感情を無視せず言語化して受け止める。 「それは辛い知らせですね」 |
| S | Strategy / Summary | 計画・まとめ | 次のステップを明確にする・「一人で抱え込まないでください」・フォローアップを約束する |

採点者の視点

採点者はここを見ている —— 悪い知らせの伝え方・SPIKESで合格答案はこういう「構造」をしている

① なぜ同じ答えでも評価が違うのか

清光学院の講師陣は、これまでに皆さんと同じ志を持った先輩受験生たちの答案を何千枚も採点し、合格・不合格の判定を下してきました。その経験から言えることが一つあります。

「正しい答えを出していても、なぜそう考えたのかが見えない答案は、採点者の印象に残らない。」

悪い知らせの伝え方・SPIKESでは、*SPIKES*プロトコルの適用根拠が答案の質を大きく左右します。

② 悪い知らせの伝え方・SPIKESで採点者が見ているポイント

「Setting→Perception→Invitation→Knowledge→Empathy→Summaryの順で展開した答案」が採点者評価を上げる

 この授業の使い方

各問題のワンポイントには「採点者がどこを評価するか」の視点が含まれています。答えを出すだけでなく、根拠を一文添える習慣を意識しながら取り組んでください。

③ 総合型選抜・口頭試問でも同じ構造が問われる

採点者（大学教員）が口頭試問で確認したいのは「答えが出るか」ではなく「思考の構造を説明できるか」です。この授業で習得する「上から俯瞰する」視点は、あらゆる試験形式に通用します。

続きは講義でご覧いただけます

この教材には、採点者の視点・核心的な解法・入試問題・演習・まとめがさらに収録されています。

大学教授陣が設計した「普通の授業では出会えない接続点」を体験できる完全版は講義でご提供いたします。

清光学院 AP SEIKO 理系講座 © 清光教育総合研究所